

[講演]

日本宣教 クリスチャン・ディアスポラの可能性¹

倉沢正則

(東京基督教大学大学院教授)

はじめに

近年、宣教学では、「ディアスポラ宣教」への関心と取り組みが盛んになってきた。そこには、世界の「グローバル化」による人の移動の加速化と、世界各地、特に、北アフリカや中東での紛争による難民の増加という背景がある。プロテスタント福音主義の世界宣教に第二次世界大戦後多大な影響を及ぼしてきたローザンヌ運動は、「第三回世界宣教会議」を2010年10月に南アフリカ・ケープタウンで開催し、『ケープタウン決意表明』(以下、『決意表明』)をその果実として出版した²。その「愛は散らされた人々に手を差し伸べる」という項において、「推定によると、自発的または非自発的な理由で、2億人が自分の出身国でない地に住んでいる。本書において、『ディアスポラ』という用語は、何らかの理由で生まれた土地ではないところに移住した人を意味する。クリスチャンを含め、様々な宗教的背景を持つ莫大な数の人々が、ディアスポラ状態で生活している」³と指摘している。この会議に先立つ2009年11月に、「ローザンヌ・ディアスポラ教育者協議会」が韓国・ソウルで開催され、「ディアスポラ宣教学に関するソウル宣言」がまとめられ、そこではディアスポラ宣教学を「生まれた土地でないところに住む人の間における神の救済的宣教を理解し、それに参画するための宣教学的枠組み」⁴と定義している。「ディアスポラ宣教学」は、聖書的・方策的な分野での宣教研究である。ディアスポラ宣教学は、神が諸国民に届くために散らされた民族集団を用いられ、また、神が散らされている民族集団に今も届こうとしているという世界宣教の新たな視点を提示し

1 2014年度東京キリスト教学園創立記念講演(2014年10月30日)に修正・加筆したものである。

2 日本ローザンヌ委員会訳『ケープタウン決意表明』いのちのことば社、2011年

3 前掲書、65頁

4 日本ローザンヌ委員会訳『収穫のために散らされた人々―ディアスポラという世界的動向を理解する』東京ミッション研究所、2012年、9頁

ているのである⁵。

「ディアスポラ研究」は、学際的に人権問題や移民問題、最近では難民問題との関連で、活発な議論が展開されている⁶。「ディアスポラ」という用語についても、歴史的にはユダヤ民族の離散を指すが、今日では国民国家の枠組みでは捉えきれない「人の移動」（自発的・強制的を問わず）を包括的に括る言語として用いられている。ただ、その用語の範疇の拡大化が課題とされてきている。ディアスポラの学問的な考察とともに、それらの多種多様な課題に取り組むなかで、キリスト教宣教学の視点から、クリスチャン・ディアスポラの潜在的な可能性を探る研究が進んでいる。このクリスチャン・ディアスポラという概念は、特に、この日本において、キリスト者のアイデンティティとも深い関わりをもつゆえに、クリスチャン・ディアスポラという視座から、日本宣教について考えてみたい。

第1節 なぜ今、「ディアスポラ」なのか

初めに、なぜ今「ディアスポラ」なのかについて、四つの点を指摘しておく。第一に、「はじめに」でも少しく触れたように、大規模な人々の移動は、グローバル化する社会において、世界大に広がっており、今やディアスポラの人々は世界の総人口の3%にも達し、すでに2億人以上にのぼっている。都市化による国内の人々の都市への流入があり、経済的豊かさを求めての移民、政治的な抑圧などによる亡命、戦争や飢饉による避難民⁷、ビジネスや留学など様々である。しかもその移動の大半は「南から北へ、東から西へ」という経済的に富んだ国々への移動で、35人に1人が移民であると言われている。

第二に、彼らは、生まれた土地を離れ、言語や文化、宗教の違う場所で生きることとなり、不安定な雇用形態、民族的な差別、文化的・宗教的な摩擦や教育機会の不均等などを被る人々である。彼らは、非常に社会的に「弱い」立場に立たされ、

5 倉沢正則「ディアスポラ宣教学」（『キリスト新聞』論壇、2009年12月5日、キリスト新聞社）

6 例えば、武者小路公秀監修『ディアスポラと社会変容』（国際書院、2008年）、臼杵陽監修『ディアスポラから世界を読む』（明石書店、2009年）等がある。

7 戦争、迫害、人権侵害などで避難を余儀なくされている人々は5,950万人である。世界中で122人に1人が難民、避難民、庇護申請者である（2014年末現在、国連難民高等弁務官事務所「数字で見る難民情勢（2014）」）。

それぞれの社会の周縁に生き、色々な支援を必要としている。日本を見ても、登録されている在留外国人が212万1,831人⁸となり、また、3ヶ月以上海外に滞在する海外邦人も129万175人⁹となっている。さらには、福島第一原発事故による避難民は4年を経て12万人にのぼっており、彼らもまた国内避難民であり、ディアスポラの人々と言える。

第三に、世俗化が進み、物質的なものに魅了されてゆく社会と、また特に、日本の場合は現世主義や現在主義がそれに拍車をかけて、教会にもその力がますます及び、いつしかそれに飲み込まれてゆく危険と危惧がある。クリスチャンも教会も「内向き」となり、自分たちのことで精一杯の状況下で、教会は活力を失い、若者離れと高齢化が進み、無牧の教会が増え、教会の存在が危ぶまれている状況がある。クリスチャンのアイデンティティとその使命に教会はもう一度立ち返る必要があり、クリスチャン人口が1%未満の日本において、ディアスポラ的なあり方の再考が求められている。

最後に、教会が脇に追いやられ、迫害を受ける時代が再び到来する予感がある。国際的には民族的・領土的な緊張が増す一方で紛争が各地で起こり、経済的利害が敵対心を助長させ、民族は民族に立ち向かい、「異質な他者」を排除し自分たちの権利を声高に主張する時代が到来しつつある。日本も近隣との緊張のなかで、自己防衛の高まりが愛国心や郷土愛を鼓舞することとなり、それに異を唱える者への有形無形の圧力が今後高まると予想される。教会はこれらの趨勢のなかで、脇に追いやられ異端視される可能性がある。まさに、ディアスポラ的な立場に立たされると言えよう。このような時代だからこそ、教会のディアスポラ性をしっかりと認識し、これに向き合う備えをしなければならない。

第2節 「ディアスポラ・キリスト教宣教」という新しい風

「ディアスポラ宣教」について、その概念や背景、その方策について概観しておく。「グローバルなキリスト教」は、キリスト教が従来の欧米から非欧米にその重

8 法務省「在留外国人統計表」(2014年12月末日現在)。ちなみに、中国65.5万人、韓国・朝鮮50万人、フィリピン21.6万人、ブラジル17.5万人、ベトナム10万人、米国5.1万人、ペルー4.8万人の順。

9 外務省「海外在留邦人調査統計表」(2014年10月1日現在)。ちなみに、米国41.4万人、中国13.4万人、オーストラリア8.5万人、英国6.7万人、タイ6.4万人の順。

心を移していることを示している¹⁰。欧米のキリスト教の世俗化と自由主義化に伴い、その勢力は今やアジア・アフリカ・南米という「南半球」に移っている。ここでは、その地域に見合うキリスト教が展開され、2050年には白人のクリスチャンが5人に1人の割合になるだろうと予測されている¹¹。

この21世紀の変化に富む景観は、キリスト教宣教に対する従来の考え方やあり方をもう一度問い直す契機となっている。例えば、これまでの大宣教命令一本での欧米型のキリスト教国から非キリスト教国への異教徒宣教（一方通行型）モデル（力のある者から力のない者への宣教）と定住型宣教モデル（西欧キリスト教社会のなかで培われたキリスト教神学と教会形成論）の再考が叫ばれている。アジア・アフリカ・中南米の貧困、民族的対立、人権抑圧、環境衛生等の課題山積にある人々の必要に届く、神の国の包括的宣教（ことばと愛のわざによる宣教、双方向型）モデルや1989年ローザンヌ・マニラ会議以降、宣教対象である「あらゆる国の人々」の「民族集団¹²」理解とその方策議論も相まって、流動的な人々も含めたより多種多様¹³な宣教モデルが論議され、具体的な活動がすでに行われている。そのなかで最近注目されているのが、「ディアスポラ宣教」と「ディアスポラ宣教学」で、欧米で培われてきた伝統的な宣教学では捉えきれない視座と枠組みへの挑戦を試みているのである¹⁴。

ディアスポラ宣教とは、「民族移動についての調査と宣教学研究を統合することによって、実践的な『ディアスポラ宣教学』が生まれた。これは新たな宣教戦略である。ディアスポラ宣教は、ディアスポラによって、そしてディアスポラを通して、『諸国民』に働きかけるための摂理的で戦略的な方法である」¹⁵と理解されている。ここで、「摂理的」ということばは、ディアスポラこそ、神が制定し祝福した

10 倉沢正則「南方のキリスト教が問いかけるもの」（『キリスト新聞』論壇、2009年2月28日、キリスト新聞社）

11 Enoch Wan, “The Phenomenon of Diaspora,” in *Diaspora Missiology: Theory, Methodology, and Practice*, ed. Enoch Wan (Portland: Institute of Diaspora Studies, Western Seminary, 2011), 13–15.

12 共立基督教研究所編「アンリーチの人々」（『宣教ハンドブック Q&A130』いのちのことば社、1991年、36–37頁）。英語表記は、“people group”とされ、「文化的、言語的に区別され得る『ひとかたまりの人々の群れ』」と定義される。

13 例えば、「家の教会」運動や「インサイダー」運動等が挙げられる。

14 『収獲のために散らされた人々』、25頁

15 『収獲のために散らされた人々』、26頁。以下の論述も19–20、26–31頁に負っている。

宣教の手段であり、神の統治の下で、神の国の拡大と大宣教命令を遂行する人々であると理解するからである。人々と民族の離散は、人間の歴史における神の救済計画の一部として捉えられ、「ディアスポラ」と「ディアスポラの人々」は、神の世界大の計画と世界宣教を達成するものであると考える。そこで、ディアスポラ宣教は三つのタイプに分類される。第一は、「ディアスポラの人々に対する宣教(mission to the diaspora)」で、故郷から新たな居住地に移った人々に対する宣教を意味し、彼らの多くは福音に対して開かれている。第二は、「ディアスポラの人々による宣教(mission through the diaspora)」で、ディアスポラのクリスチャンが故国内外の近親者に宣教することを意味する。第三は、「ディアスポラの人々の周囲への宣教(mission beyond the diaspora)」で、ディアスポラのクリスチャンがその受け入れ社会の人々に宣教することを意味する。その社会の言語習得や文化適応を果たした後において、彼らこそ異文化宣教の最適な橋渡し役となり、その社会の地域教会を活性化させ、教会開拓にも貢献できる人々である。第二と第三にあっては、それぞれの国にある母語教会の働きがあり、また、近年、中国人やフィリピン人においては、クリスチャン・ディアスポラとしての使命と働きのための国際的なネットワークが構築されて、神の救贕的な宣教の働きを担う働き人として神学的な訓練を受けて、その国での宣教に果敢に取り組んでいる現状である¹⁶。

第3節 ディアスポラ宣教と日本

「ディアスポラ宣教」を日本の状況に当てはめてみると、新たな日本宣教の展望が拓けてくる。「ディアスポラの人々への宣教」は、日本にいるディアスポラの人々とはどのような人々であり、そこにはどのような課題と必要があるのかを知ることから始まる。私たちが日本宣教というときには、日本にいる外国人は見落とされている傾向がある。けれども、前述のごとく、日本には多くの在留外国人がおり、私たちの隣人となっている。日本にあるそれぞれの母語教会との宣教協力や、在留外国人伝道に携わっている様々な機関や団体との協働が必要となってくる。また、2009年9月に第5回日本伝道会議が北海道の札幌で開催されたが、その開催地は日本の近代化のなかで、その誇りと尊厳を奪われたアイヌの人々への無理解と無関心、差別の加害者という罪と向き合う時となった。彼らは、近代日本の同化政策の

16 倉沢正則「ディアスポラ宣教学」(『キリスト新聞』論壇、2009年12月5日、キリスト新聞社)

もとで「強制的な移住」を余儀なくされ、土地私有の権利を制限され、アイヌ語をはじめ独自の文化を否定された、いわば、日本国内の「ディアスポラの民」と位置づけられよう¹⁷。また、2011年3月11日に起こった東日本大震災による福島第一原発事故による避難者も、国内避難を余儀なくされた「ディアスポラの人々」と考えることができる。日本におけるそれぞれの教会が置かれている地域には、それらの「ディアスポラの人々」の存在に目を向け、関心と重荷をもつ必要があると言わざるをえない。後者においては、震災被災者への支援とともに、現在、様々な連携と協力が図られているところである。

次に、「ディアスポラの人々による宣教」と「ディアスポラの人々の周囲への宣教」という観点からは、まず日本におけるクリスチャンと教会それ自身が、「クリスチャン・ディアスポラ」としての存在意義をもう一度問い直すところから始めなければならない。特に、プロテスタント日本宣教157年の今日でも、プロテスタント人口は0.5%を超えず、カトリック教会やその他も合わせても1%未満の状況は変わらない。教会は日本各地にまさに散在している状況である。日本のプロテスタント教会は、平和憲法のもと、「信教の自由」が与えられ、国家との関わりから自由となり、教会史的観点からは「自由教会」という形態をとっている。しかし、教会の宣教努力にもかかわらず、非キリスト教社会にあってその存在と影響力はきわめて限られ、今日の日本社会におけるクリスチャンと教会のあり方や特質が問われているところである。かつて多神教世界にある強力なローマ帝国の支配下にあった初代教会や紀元4世紀前半までの教会の状況とは異なるが、キリスト者が少数で強大な日本の宗教的・文化的環境のもとで、愛国心や日本の伝統への回帰が増すなか、また、多宗教・多文化的な様相を呈してきた今日的な状況にあって、日本でのクリスチャンの立ち位置を考えると、紀元4世紀までの西洋のクリスチャンや教会の状況から学ぶことは意義のあることと思われる。

そこで、この主題を取り扱っている「ペテロの手紙第一（以下、ペテロ書）」から多くの示唆を受けることができる¹⁸。ペテロ書には、ディアスポラを指す「散って寄留している」(1:1)クリスチャンの存在と、そのような彼らの「旅人¹⁹であり寄留者」

17 倉沢正則「ディアスポラ宣教協力」（『キリスト新聞』論壇、2009年10月10日、キリスト新聞社）

18 今後の論述には、Miroslav Volf, *Captive to the Word of God* (Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing, 2010), 64-90の議論に負っている。

19 日本語訳（新改訳、新共同訳とも）で「旅人」とされているが、原語では、“paroikous”

(2:11) という自己理解を示す言葉がある。ペテロ書の背景には、小アジアにおける非キリスト教的な環境に生きるクリスチャンや教会の現実があった。そこではキリストの御名のゆえの迫害や苦しみに彼らは直面していた。クロアチア出身で現在、米国イエール神学校組織神学教授のミロスラフ・ボルフ (Miroslav Volf) は、ペテロ書を神学的に考察するなかで、当時のクリスチャンの「旅人であり寄留者である」とする存在意義について、その特異性 (Difference) という視点で興味深い論述を行っている。「旅人であり寄留者」というのは、その社会にあって「距離を置く」存在で、その価値観や求めるもの、その制度や政治から距離を置くということである。クリスチャンの自己理解は、回心前には「神から距離を置いて」生きる存在から、回心後にあっては、神に「より近い」存在となり、今度はその社会に「距離を置く」者となる。これを終末論的特異性 (Eschatological Difference) とヴォルフは名づけている²⁰。

この世から宗教的に距離を置くことは常に社会的にも距離を置くこととなり、時に迫害を受ける。しかし、再生によって、クリスチャンは古い生き方から距離を置き、「生ける望み」をもって、キリストの到来を待ち望んで生きる終末論的な存在となるわけで、その意味で、社会から距離を置いて生きるクリスチャンは終末論的な特異性をもつと言える。また、社会にあって特異的に生きるクリスチャンが共同体を形成する教会自身も社会にあって旅人 (異質な外国人) 共同体となり、「教会的特異性 (Ecclesial Difference)²¹」を帯びるのである。

この社会から距離を置く特異性は、社会との没交渉を意味するのではなく、クリスチャンのアイデンティティと深く関わっている (Difference and Identity)²²。このアイデンティティは、より積極的なあり方で社会に貢献するものとなる。「旅人であり寄留者として」生きる生き方は、神の聖さとキリストの受難に倣うかたちで、神に距離を置く社会にあって、「立派な振る舞い」(2:12) を促す。文化的に形づくられてきた「古い」生き方や習わしから距離を置くなかで、社会から疎まれ、侮辱され、迫害されても、そこに祝福と受容という善をもって返す生き方が、その社会を変えることができる。社会から距離を置くことと、その社会に関わってゆくという一見矛盾することが同時に果たされてゆくわけである (Difference and

で「異質な (在留) 外国人」というニュアンスをもっている。

20 Volf, *Captive to the Word of God*, 69.

21 Volf, *Captive to the Word of God*, 73.

22 Volf, *Captive to the Word of God*, 75.

Acculturation) ²³。

ペテロ書では、クリスマンが社会の仕組みを変革することまでは言及されていないが、社会への使命を明確に表している。社会から距離を置くことは、社会から孤立することではなく、社会への使命を果たすための前提となるというわけである。違いを生み出すには、違わなければならない。クリスマンや教会がこの違いをどう示し、その使命を果たすのかが問われることとなる。ペテロ書で、ヴォルフは、「柔和さ」(3:4) や「優しさ」(3:16) という言葉が重要性を帯びてくると言い、クリスマンの存在目的である「やみの中からご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを宣べ伝える」(2:9) という使命を果たすために重要なのは、その置かれた社会にあって「穏やかな違い (Soft Difference) ²⁴」を生きることだと考察している。「違い」を対立的 (hard) なものとして、その宣教に圧力や脅しを用いるのではなく、「穏やかに」未信の人々の立場を尊重して、それを引き受けて生きることの意味している。これは受難のキリストの足跡に従うことであり、クリスマンのアイデンティティでもある。「穏やかな違い」に生きるクリスマンにとって、宣教は基本的に「証し」であり「招き」という形態をとる。

この「穏やかな違い」に生きるクリスマンは、社会にあって異質である限り、他の人々と「同じように度を過ごす」(4:4) ことをせず、差別や迫害に遭う。この世の価値観と神の国の価値観がぶつかるわけである。しかし、クリスマンの違いは、「立派な振る舞い」によって、その時にはノンクリスマンに「悪人呼ばわり」されるようでも、それを見る彼らがやがてそのことを受け止めるようになり、「神をほめたたえる」ことにつながるとペテロ書は語る (2:12)。ヴォルフは、クリスマンの価値観とノンクリスマンのそれは互いに釣り合いが取れないが、ノンクリスマンがクリスマンの「立派な振る舞い」を見て、キリスト信仰に導かれるときに釣り合いが取れるようになるという (Difference and Commensurability) ²⁵。ただ、クリスマンが生きる世は、決して一枚岩でなく様々な価値観を織り成すところであることを覚えなければならない。迫害者もいれば、「立派な振る舞い」に悪口の口を塞ぐ人もおり (2:15)、善悪を知る人もいて (2:14)、さらにはクリスマンに理解を示し、信仰に導かれる人もいる。決して皆が迫害者や悪口を言う者ではない。

²³ Volf, *Captive to the Word of God*, 78.

²⁴ Volf, *Captive to the Word of God*, 83.

²⁵ Volf, *Captive to the Word of God*, 86.

以上、クリスチャンの立ち位置について、ペテロ書からヴォルフの視点を通して見てきた。その後のローマ帝国におけるクリスチャンへの憎悪は、帝国当局によってというよりも都市市民によるものとされ、その理由として、クリスチャンが公然とギリシア・ローマの神々を認めないこと、また、都市などの共同体の神々に崇敬を表す宗教行事にクリスチャンが参加しないこと、クリスチャンの多くが「よそ」から都市に移住してきたため反感を招きがちであったことなどが挙げられている²⁶。これらはクリスチャンの特異性がより対立を引き起こしたケースと考えられるが、昨今の研究では、これまでの初期キリスト教の独自性や突出性が否定され、むしろ一般ローマ帝国社会との距離の近さが主張されている²⁷。この論述で注目されるのは、帝国当局もさることながら都市市民からの迫害の根っこにあるギリシア・ローマの神々を崇めないことによる「神々からの災いへの恐れ」、当時の都市市民の共同体性を象徴する宗教行事への不参加が意味する「反社会性」、そして都市部に移住してくる「よそ者」クリスチャンへの「警戒感、反感」ということである。これらの三点は、今日の日本の社会、とりわけ、地方や田舎に行けば行くほど、現実味を帯びたものとなる。ノンクリスチャンの間で、いみじくもパウロにテルテルが放ったことば、「この男は、まるでペストのような存在で、世界中のユダヤ人の間で騒ぎを起こしている者」（使 24:5）のように、クリスチャンは社会を混乱させる輩と映るのか、それともそれらを突き抜けて、今日の多言語・多文化の人々をつなぐ思想を提示し、「橋渡し役」として実践し、多文化共生社会の実現に寄与する一群と映るのか、クリスチャンの特異性はこの二面性を常に抱えていることを指摘しておきたい。

このところで、東京基督教大学初代学長の丸山忠孝氏は、明治期のクリスチャン評論家の山路愛山の「精神的革命は時代の陰より出づ²⁸」を取り上げて、キリスト教のディアスポラの精神が正しく外に向けられれば、時代の精神的革命を担う力となりうると精励している²⁹。だが、今日のキリスト教界・神学界も山路愛山が20世紀初頭のそれを手厳しく批判したように、ディアスポラの外への挑戦でなく内への

26 松本宣郎『キリスト教徒が生きたローマ帝国』日本キリスト教団出版局、2006年、33頁

27 松本、前掲書、34頁。例えば、クリスチャンは忠実な帝国国民であり、皇帝を尊敬し、ローマの軍隊にも入り、職業を選ぶこともなかったと記されている。

28 山路愛山『基督教評論・日本人民史』岩波文庫、1974年、24-26頁

29 丸山忠孝『日本人キリスト者からキリスト者日本人へ』いのちのことば社、1997年、17頁

逃避の症状がみられると警鐘を鳴らしている³⁰。彼は、初期の日本宣教にあたった欧米の宣教師の多くが敬虔主義の流れを汲み、その特徴は啓蒙主義との直接対決よりはキリスト者の生きた信仰をみせる性格が強く、近代国家や近代社会を生き抜いたキリスト教というよりは、それらとの対決を避けて信仰の内面性や個別性に注目し、「日本社会に広くアピールする価値観の創造よりは個人の精神世界における安定性を志向するものであった」からだとして分析している³¹。クリスチャンがアイデンティティ・クライシスに直面している。クリスチャン・ディアスポラの立ち位置が、「迷える一匹的メンタリティやゲッター・メンタリティ³²」に陥る危険を鋭く指摘している。これを克服し、ディアスポラ精神を正しく外に向けるには何が必要なのだろうか。

前述したようにクリスチャンの特異性は、ペテロ書によれば、「選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民」(2:9) というアイデンティティにあり、総じて「神の民」(2:10) というあり方にある。そのあり方が、異邦人の間では「旅人であり、寄留者」になるということであろう。これはアブラハムに始まり、イスラエルの民を指し、そしてキリストの教会に受け継がれたもので、そこではその特異性（宗教的、社会的、倫理的）のゆえに、近隣との緊張関係に置かれるとともに、その存在ゆえの使命(2:9)があった。そしてこの使命を果たすためには、内なる挑戦、すなわち、「たましいに戦いをいどむ肉の欲を遠ざける」(2:10) ことであり、外なる挑戦、すなわち、「異邦人の中であって、りっぱにふるまう」こと(2:11) であったわけだ。丸山氏はその著書で、内なる挑戦として、「内なる日本人性と日本化」への挑戦とし、外なる挑戦として、「国家」、その焦点としての天皇制への挑戦を掲げている³³。預言者的なスタンスをもって時代にインパクトを与えようとする気迫さえ伺える。これをグローバル化する社会とディアスポラという観点から見ると、異質な他者を排除しようとする日本人の排他性と、それらを日本化へと向かわせる愛国心教育や天皇制機軸論への回帰に対峙するクリスチャンと教会が見えてくる。ただ著者も指摘するように、クリスチャン個人の精神運動としての挑戦は可能だが、それを支える教会的基盤（組織）の弱さがある³⁴。その意味ではキ

30 丸山、前掲書、21 頁

31 丸山、前掲書、40、45 頁

32 丸山、前掲書、44 頁

33 丸山、前掲書、38、52 頁

34 丸山、前掲書、45 頁

リスト教社会を経た制度的教会が生み出してきた神学的・教会的な伝統を踏まえつつも、世俗的かつ多神教的社会の日本にあって、「イエス・キリストへの信仰、礼拝、高い倫理性」に裏付けられたディアスポラ的なクリスチャン・シナゴグとしての教会の祭司的な挑戦にこそ、その特異性を発揮させることができるのではないかと考える。

東京基督教大学は、これまでの牧師養成的な神学教育のあり方を超える、教職と信徒両方を世界宣教の働き人として育成するという画期的な取り組みをしてきた。そこには、1974年に始まるローザンヌ運動の宣教観が根付いている。宣教を伝道と社会的責任とし、その社会的責任には預言者的な「社会的行動」と祭司的な「社会的奉仕」という概念が生まれた。この社会的な奉仕者の育成を目指して、「国際キリスト教福祉学科」の創設となったわけである。この学科では、増え続ける介護を必要とする高齢者や社会的に弱い人々に、「イエスの愛」をもって寄り添う働き人を育成すること、また、グローバル化する社会にあって異なる他者をつなぎ、隔ての壁にチャレンジする国際人を育成するという高い志を掲げている。みことばのミニスターと憐れみのミニスターの両方を育てるという挑戦ははまだ途上にあるが、必ずや日本を変え、世界に変革をもたらすと信じる。クリスチャン・ディアスポラとしてのアイデンティティに堅く立ち、宣教的な性格を帯びたクリスチャン・シナゴグの形成こそ、グローバル化する社会と高齢社会の21世紀の日本に挑戦するクリスチャンと教会のあり方ではないかと思う。

このクリスチャン・シナゴグは、既述のとおり、日本においては日本人のみの教会だけでなく、日本にある多文化・多言語教会をも内包している。さらに、外国にある日本語教会こそはまさに、日本人宣教を担うディアスポラ的な教会である。すでに、内外邦人ディアスポラネットワークが整備されつつある。シナゴグの成立はユダヤ人のバビロニア捕囚期と言われているが、エズラの働きのなかでディアスポラ・シナゴグとパレスティナ（エルサレム）との結びつきが強くあった。そこでは祈りと律法の教育がなされ、安息日の集会所であり礼拝の場でもあった。また、葬儀や政治的集会、情報の共有所、旅人の宿泊所、裁判所の機能も有していたと言われている³⁵。新約時代までに、ディアスポラのユダヤ人の存在は地中海世界のローマ帝国やペルシャまで広くその存在が確認されている（使徒2:9-11）。彼らは、パレスティナ在住のユダヤ人数を凌ぎ、500万人から600万人を数えるほどで、社会

35 Narry F. Santos, "Exploring the Major Dispersion Terms and Realities in the Bible," in *Diaspora Missiology*, 32.

のあらゆる社会・経済階層に存在していたと言われる³⁶。そこには、異邦人からユダヤ教に改宗した改宗者や、異邦人で割礼は受けないがユダヤ教の唯一神信仰とその倫理生活に共鳴してシナゴグに参加している「神を恐れる人々」がおり、パウロの異邦人伝道の最初の一步は、この各地に存在していたディアスポラ・シナゴグであった。興味深いのは、ディアスポラのユダヤ人の祖国パレスティナへの帰属意識がディアスポラの人々を堅く結びつけていたことであり、ディアスポラのユダヤ人の祖国との結びつきがパレスティナに住むユダヤ人の生活を刷新し活性化させたことである³⁷。

キリスト教会はその後、コンスタンティヌス後の帝国教会まで、「クリスチャン・シナゴグ」としての歩みを始めたと言ってよからう。さらには、今日の自由教会型の教会を経た日本の教会はまさにこの「クリスチャン・シナゴグ」的なあり方のなかに置かれていると言える。ディアスポラのユダヤ人とそのシナゴグから学ぶことは、第一に、彼らを堅く一つに結びつけた祖国への帰属意識は、プロテスタント福音派の私たち教会をしていったいどこに置くことができるのかという問いとなる。それは権威ある聖書であり、イエス・キリストの神の国への帰属意識であろうか。日本にあって、このクリスチャン・ディアスポラ・シナゴグの一致と協力は、そのアイデンティティを共有し、聖書に基づくイエス・キリストの神の国への帰属意識をどのように確立させるかにかかっていると言える。この絆を強める協教的な連帯が、それぞれの地域でより強められていくことが肝要である。防災、福祉、幼児教育等への地域をベースとした日頃の教会協力は、やがて到来するであろう為政者や市民による教会への迫害に対応できる相互の「物質的・精神的・社会的・霊的支援」の基盤をつくることとなる³⁸。地域での教会指導者の日頃の交流、信徒間のさまざまな連携を促す機会をつくることが肝要である。

第二として、ディアスポラのユダヤ人の祖国への結びつきがパレスティナに住むユダヤ人の生活を刷新させ活性化させたということは、現代の私たちに大きなチャレンジを与えている。初代教会においても、異邦人のクリスチャンの登場は、ユダ

36 Santos, "Exploring the Major Dispersion," 35.

37 Ted Rubesh, "Diaspora Distinctiveness: The Jewish Diaspora Experience in the Old Testament," in *Diaspora Missiology*, 70-71.

38 4世紀までのローマ帝国における迫害時でのクリスチャンの生活について興味深いものは、Ivo Lesbaupin, *Blessed are the Persecuted: Christian Life in the Roman Empire, A.D. 64-313* (Maryknoll: Orbis Books, 1987).

ヤ人のクリスチャンとの間で、何が本質的なものであるのかについて議論を深める機会となった。エルサレム会議は、「この道」(使徒9:2)がユダヤ教の一派の域を超え、ユダヤの宗教的な伝統の殻を破り、ユダヤ人も異邦人もともに神の民とされるキリスト教としての歩みへの転換点となった。グローバル化する世界にあって、邦人ディアスポラは増え、外国でクリスチャンとなる人が増えている。日本の教会はこのクリスチャン・ディアスポラの人々³⁹を適切に受け止めて、異文化理解と国際的視野をもった彼らから学ぶことによって、日本の教会は刷新され活性化されるに違いない。想定されるクリスチャン・ディアスポラ邦人との様々な緊張は、その問題解決の過程のなかで日本の地域教会に活力を与え、福音の本質を再認識させ、創造的な日本宣教へと私たちを変えていく。また、これらのクリスチャン国際人を日本の地域教会は用いて、彼らを在留外国人に福音を届ける「ブリッジビルダー」となるよう励ますことができるのである。

おわりに

本稿で日本宣教をクリスチャン・ディアスポラの観点から考えてみた。「旅人であり寄留者である」クリスチャンの「穏やかな違い」というアイデンティティに立ち、「世の光・地の塩」としての社会への役割を祭司的な側面から取り扱った。戦後70年(2015年)の大きな節目を経て、2020年の東京オリンピックから2030年を見据えた日本宣教を考える時、グローバル化に伴う多文化共生社会や日本の少子高齢化社会が進むなかで、ケア(看護・介護)とイノベーション(革新)を中核とした復興と地方創生へと日本社会は動いていくように思われる。歴史と世界の潮流を踏まえての伝道と社会的責任の両輪を担う被造物ケアの動きは、いよいよ加速されてくる。気候変動や生物多様性などの環境変革、流通・金融のグローバル化のなかでの政治・経済・文化の社会変革、これらの諸課題を統合する「平和と持続可能な社会づくりの担い手を育む教育と活動(ESD)」、さらには今後予想される首都圏直

39 内外のクリスチャン・ディアスポラ邦人のネットワークはこの20年間で整備されつつある。海外の日本語教会(アジア・北米・ヨーロッパ等)によるアジア日本語教会ファミリーキャンプ、ヨーロッパ・キリスト者の集い等、Reaching Japanese for Christ, Japanese Christian Fellowship Network, Diaspora Network for Japanese, Int'l VIP Clubなどの連携や協力がなされている。

下型地震等での地域ケアセンター構想等々の課題山積みの日本⁴⁰で、クリスチャン・ディアスポラとクリスチャン・シナゴグが貢献できる領域は多方面に開かれている。教団／教会の宣教と多種多様な信徒による内外ミニストリーをつなぎ、次世代ネットワークを構築するクリスチャン・ディアスポラ邦人のブリッジビルダーの働きが今後の日本宣教の鍵を握るに違いない。

40 青木勝「復興・再生をめざす希望の次世代ネットワーク」2010.01.01